

宮城学院のスクール・モットーは「神を畏れ、隣人を愛する」ということですが、この隣人愛の基本は「では、わたしの隣人とはだれですか」（ルカ 10：29）と問いながら、自分にふさわしい隣人を見出そうとすることではなく、事実苦しみ助けを求める人がいたらその人の「隣人になる」（ルカ 10：36）ということにあります。

しかしながらコロナ禍ではこの主イエスが説く隣人愛を単純に実行することが困難になってしまいました。3月18日にメルケル首相がドイツ国民に向かってテレビを通して語り掛けた演説は世界の多くの人々の心を揺さぶる素晴らしいものでした。そのなかで「困難な時期であるからこそ、大切な人の側にいたいと願うものです。私たちにとって、相手を慈しむ行為は、身体的な距離の近さや触れ合いを伴うものです。しかし残念ながら現状では、その逆こそが正しい選択なのです。今は、距離を置くことが唯一、思いやりなのだということ、本当に全員が理解しなければなりません」との一節が、私の心に深く刻まれたことでした。

難しい言葉を一言も用いず、これほど深く分かりやすくコロナ禍における人と人との関りのあり方の基本を説いた表現を私は知りません。まさにコロナ禍での隣人愛の実践（思いやり）には「距離を置くこと」が求められるのです。そこには隣人愛の逆説が生じていると言えるでしょう。そのような現実を受け入れることを私たちに強いるということにおいて COVID-19 は極めて残酷にして悲劇的な災いと言えるのではないのでしょうか。しかし、またそのことは「神を畏れ、隣人を愛する」ことを重んじる教育研究共同体である宮城学院に連なる者たちに、距離を置きつつも「共に生きる」道を如何にしたら見出すことができるのかという新しい問いをも突き付けてくるのではないのでしょうか。

そのことを思いめぐらすのにとても役立つガイドブックとして正木恭介副学長から紹介されたのが日本赤十字社の「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～」です。日赤のホームページを開いて、ぜひよく読んでほしいと思います。概要は以下のようなものです。

COVID-19 は、深く関わり合う三つの感染症を生み出します。第一は言うまでもなく感染症という病そのものです。第二は「不安と恐れ」という感染症、そして第三は「嫌悪、偏見、差別」という感染症です。この三つの感染症は深く関わり合いつつ、放置しておけば負のスパイラルをどんどん広げていきます。それを防ぐためには、どうしたらよいのでしょうか。第一の感染症のためには「手洗い」、「咳エチケット」、「人混みを避けること」、第二の感染症のためには「気づく力」、「聴く力」、「自分を支える力」を高めること、そして第三の感染症のためには「確かな情報を広めること」、「差別的言動に同調しないこと」、「COVID-19 に対応している方々をねぎらい、敬意を払うこと」となっています。

政府も、自治体も初期の緊急対応から「with コロナ」の段階に入り、緊急事態宣言を容易には出さず、また出せなくなりつつあります。感染症がもたらすリスクと経済活動が停止することでもたらされるリスクを十分に衡量しつつ、如何に健康と命を守りつつ私たちの日常の生活を動かしていくのかというぎりぎりの決断を迫られるからです。言い換えれば、距離を置きつつ、共に生きる道を模索し続けるということでしょう。もちろん、その決断に絶対の解はありません。人間のなしえる限りの最善を求めて決定していかざるを得ないのです。それはまた宮城学院の法人、大学、中高、こども園にとっても同じことが言えるのではないのでしょうか。

コロナ禍にあって讚美歌 288 番（讚美歌 21・460 番）の 2 節「行く末遠く見るを願わじ、主よ、わが弱き足を守りて、ひとあし、またひとあし、道をば示したまえ」との歌詞がしばしば脳裏に浮かんできます。出エジプトの民が、「昼は雲の柱、夜は火の柱」（民数記 13 章 21 節）に導かれたことに着想を得て、19 世紀イギリスを代表する神学者のジョン・ヘンリー・ニューマンが作詞したものです。わたしたちにとっての「支える力」としての主信頼しつつ、ひとあし、またひとあし、距離を置きつつ共に生きる道を模索する歩みを共に全うしていければ幸いです。